

子宮頸がん予防ワクチンの接種を受けられる方へ

○子宮頸がんヒトパピローマウイルス（HPV）

1. ヒトパピローマウイルス（HPV）感染は、特別な感染症ではなく、誰もが感染する可能性があります。100 種類以上の遺伝子型があるHPVの中で、とくに発がん性が高いタイプ（16 型、18 型）の感染が問題となります。
2. 近年、20～40 歳代の子宮頸がんは増加傾向にあります。子宮頸がんの約 70%は、HPV16、18 型感染が原因とされています。HPVに感染しても多くの場合、ウイルスは自然に排除されますが、ごく一部で数年～十数年かけて前がん病変の状態を経て、子宮頸がんを発症します。
3. ワクチンでHPV感染を防ぐとともに、子宮頸がん検診によって前がん病変を早期発見することで、子宮頸がんが予防できます。

○子宮頸がん予防ワクチン（サーバリックス、ガーダシル、シルガード）

1. 現在、国内で接種を受けることができる子宮頸がん予防ワクチンは、国内外で子宮頸がん患者から最も多く検出されているHPV16、18 型のウイルス様粒子を含んでいる 2 価ワクチン（サーバリックス）と、尖圭コンジローマや再発性呼吸器乳頭腫の原因ともなるHPV6、11 型も加えた 4 価ワクチン（ガーダシル）、さらに 31、33、45、52、58 型も加えた 9 価ワクチン（シルガード）※があります。
※9価ワクチンは、令和5年4月1日より定期接種での使用が開始となりました。
2. HPV未感染者（学童女子）を対象とした海外の報告では、感染、前がん病変予防効果に関して各ワクチンとも高い有効率が示されていますが、HPV既感染者には有効性が低いことから、初回性交渉前に接種することが推奨されています。
3. 国内の添付文書に記載されている副反応としては、注射部位の疼痛（82.5～99%）、発赤（30.2～88.2%）、腫張（25.4～78.8%）などの局所反応と、軽度の発熱（5.6～5.8%）、倦怠感などの全身反応がありますが、いずれも一過性で数日以内に軽快します。
4. 接種を受けた後の失神（血管迷走神経反射）が現れることがありますので、失神による転倒などを防止するため、接種を受けた後の移動の際には、保護者の方などが付き添うようにし、接種を受けた後 30 分は背もたれのある椅子に座らせるなどしたうえで、なるべく立ち上がらないようにしてください。
5. 保護者の方は、接種を受けられた方の状態をよく観察してください。

○子宮頸がん予防ワクチン予防接種の受け方

子宮頸がん予防ワクチンでしっかりと免疫をつくるため、次のような方法で接種してください。

1. 対象者 **小学校 6 年生～高校 1 年生相当の女子**（中学 1 年生での接種開始が望ましいとされています。）
※令和 4～6 年度実施のキャッチアップ接種の令和 8 年 3 月末までの条件付き延長については、市ホームページ参照。
2. 接種回数および接種間隔（ワクチンの種類によって、接種間隔が異なります。）

ワクチンの種類	回数	標準的な接種期間	法律上の接種間隔
サーバリックス （2価）	3回	2回目:1 回目の接種から 1 か月後 3回目:1 回目の接種から 6 か月後	1 か月以上の間隔を置いて 2 回接種し、3 回目は 1 回目から 5 か月以上、かつ 2 回目から 2 か月半以上の間隔を置いて接種する。
ガーダシル （4価）	3回	2回目:1 回目の接種から 2 か月後 3回目:1 回目の接種から 6 か月後	1 か月以上の間隔を置いて 2 回接種後、3 回目は 2 回目から 3 か月以上の間隔を置いて接種する。
シルガード （9価）	初回接種開始年齢：15 歳未満 ※2 回の接種で完了とすることが可能。（3 回接種も可。）		
	2回	6 か月の間隔を置いて、 <u>2 回接種</u>	5 か月以上の間隔を置いて、 <u>2 回接種</u> 。 （注意）1 回目と 2 回目の接種間隔が 5 か月未満となった場合は、合計 3 回の接種が必要となり、3 回目は 2 回目から 3 か月以上の間隔を置いて接種する。
	（3回）	（2回目:1 回目の接種から 2 か月後） （3回目:1 回目の接種から 6 か月後）	（1 か月以上の間隔を置いて 2 回接種後、 3 回目は 2 回目から 3 か月以上の間隔を置いて接種する。）
	初回接種開始年齢：15 歳以上 ※ガーダシル（4 価）と同じルールです。		
	3回	2回目:1 回目の接種から 2 か月後 3回目:1 回目の接種から 6 か月後	1 か月以上の間隔を置いて 2 回接種後、3 回目は 2 回目から 3 か月以上の間隔を置いて接種する。

※ 上表の接種間隔から遅れた場合は、接種を受けることができた時点で、速やかに接種を受けてください。

※ いずれのワクチンを接種する場合も、計 3 回の接種は 1 年以内に実施することが望ましいとされています。

※ また、原則、同じ種類のワクチンで接種を完了することをおすすめしています。

例外については、裏面の「各ワクチンの互換性について」を参照してください。

[裏面もご覧ください]

○各ワクチンの互換性について

原則、同じ種類のワクチンで接種を完了することをおすすめしています。

例外的に、「サーバリックス（２価）」または「ガーダシル（４価）」を使用して規定の回数の一部を接種した者が、残りの回数を『シルガード（９価）』を使用して接種を行う交互接種については、安全性と免疫原性が一定程度明らかになっていることや海外での取扱いを踏まえ、適切な情報提供に基づき、医師と被接種者等がよく相談した上であれば、実施して差し支えありません。

サーバリックスとガーダシルの互換性に関する安全性、免疫原性及び有効性に関するデータは限定的であることから、原則、同じ種類のワクチンを接種し、サーバリックス（２価）とガーダシル（４価）につきましては、交互に接種しないでください。

○予防接種不適当者（次の方は接種を受けないでください。）

1. 明らかに発熱している方（通常は37.5℃を超える場合）
2. 重い急性疾患にかかっていることが明らかな方
3. このワクチンの成分によって、アナフィラキシー（通常接種を受けた後、30分以内に出現する呼吸困難や全身性のじんましんなどを伴う重いアレルギー反応のこと）をおこしたことが明らかな方
4. その他、かかりつけの医師に予防接種を受けないほうがよいと判断された方

○予防接種要注意者（次の方は接種を受ける前に、医師にご相談ください。）

1. 血小板減少症や血液の病気を有する方
2. 心臓血管系疾患、腎臓疾患、肝臓疾患、血液疾患、発育障がいなどの基礎疾患のある方
3. 過去に予防接種を受けた後、2日以内に発熱、全身性発疹などのアレルギーを疑う症状のみられた方
4. 過去にけいれん（ひきつけ）をおこしたことがある方
5. 過去に免疫状態の異常を指摘されたことのある方、もしくは先天性免疫不全症と診断された近親者がいる方
6. 妊婦あるいは妊娠している可能性のある方
7. 現在、授乳中の方

○予防接種後の注意・副反応（接種後は以下の点に注意してください。）

1. 子宮頸がん予防ワクチンの接種を受けた後に、注射による恐怖、痛みなどが原因で、気を失うことがあります。気を失って転倒してしまうことをさけるため、接種を受けた後すぐに帰宅せず、30分程度は接種した医療機関で座って安静にし、医師とすぐに連絡がとれるようにしておいてください。
2. 子宮頸がん予防ワクチンの接種を受けた後に、注射した部位が腫れたり、痛むことがあります。これは、体内に備わっている抵抗力が注射した成分を異物として認識するためにおこります。通常は数日間程度で治まります。
3. 接種部位は清潔に保ちましょう。発熱などもなく、体調がよければ、接種日当日の入浴は問題ありませんが、接種部位をこすことはやめましょう。
4. 接種日当日は、激しい運動はさけてください。その他はいつもどおりの生活で結構です。
5. 3回の接種の途中で妊娠した場合には、接種を見合わせ、その後の接種の受け方については、医師にご相談ください。
6. このワクチンの接種を受けた後、違う種類のワクチンの接種を受ける場合には、1週間以上の間隔をおく必要があります。
7. 接種を受けた後1週間は症状に注意し、気になる症状があるときは接種を受けた医師にご相談ください。
8. 子宮頸がん予防ワクチンの接種を受けた後も、ワクチンでは予防できない型のHPVによる病変を早期発見し、早期治療するために子宮頸がん検診の受診が必要です。20歳を過ぎたら定期的に子宮頸がん検診を受けましょう。

○予防接種健康被害救済制度

重い副反応がおこる可能性がきわめて低いですが、皆様が安心して予防接種が受けられるように、予防接種法では健康被害救済制度が設けられています。

万が一、重い副反応がおこった場合、厚生労働大臣が、その副反応が予防接種法に基づく定期予防接種を受けたことによるものであると認定したときは、法に基づく健康被害救済対象となります。